

## 富士山火山防災における観測情報の発信と防災教育の拠点-富士山火山防災情報センターの取り組み-

### The center for conveying volcano monitoring information and diffusion and enlightenment of disaster prevention education

内山 高<sup>1\*</sup>, 藤田 英輔<sup>2</sup>, 小園 誠史<sup>2</sup>, 輿水 達司<sup>1</sup>

Takashi Uchiyama<sup>1\*</sup>, Eisuke Fujita<sup>2</sup>, Tomofumi Kozono<sup>2</sup>, Satoshi Koshimizu<sup>1</sup>

<sup>1</sup>山梨県環境科学研究所, <sup>2</sup>防災科学技術研究所

<sup>1</sup>YIES, <sup>2</sup>NIED

#### 1) はじめに

火山活動に関する情報の収集と地域住民等に対する火山知識の普及啓発は、火山への住民の正しい理解を深め、火山防災対策を進めるうえで基礎となる。とくに富士山が万一噴火した場合には、周辺市町村のみならず広範な地域に影響が及ぶことから、内閣府を中心に火山ハザードマップが作成され、それにつづいて地元防災協議会により避難マップ等が作成された。このなかで、研究成果や観測情報を地元市町村等に提供していくため、山梨県環境科学研究所に富士山火山防災情報センターの機能を付加し、併せて、火山観測監視および火山観測情報共有の体制の構築、火山防災教育の普及啓発の推進を図っている。

#### 2) 富士北麓地域の火山活動観測体制

富士山の火山活動の観測体制について、環境科学研究所は忍野村地内に低周波地震計等を設置し、観測データについては(独)防災科学技術研究所に専用線で送信され、同研究所の観測データとともに解析され、環境科学研究所にフィードバックされる体制を整えた。さらに、高温のマグマや火山ガスが地下深くから上昇して来て地下水と接触することで、爆発的噴火に変化し、噴火様式が変化すると考えられる。このため、環境研では、富士北麓の4箇所に観測点を設けて、地下水変動、地下水水位、地下水温と水質の連続観測を実施している。

#### 3) 富士山北麓での仮想溶岩流シミュレーション

防災教育上、観測情報や噴火史データを基に、県民等に分かり易い情報の提供・発信方法を検討するために、防災科研と共同研究を行っている。この中で、火山現象について学ぶことは重要と考え、富士山の噴火により、溶岩流が発生した場合を想定し、仮想溶岩流シミュレーションを実施し、防災教育の普及・啓発に取り組んでいる。溶岩流シミュレーションコードは、防災科研が中心となり開発したLavaSIMを用い、防災科研のスーパーコンピュータSGI Origin 3800により計算を実施した。溶岩流出地点は、内閣府富士山ハザードマップ検討委員会報告書(2004年6月)による想定噴火口の範囲と過去の溶岩流流出実績を念頭に置いて、北東へ流下する3ケース、北西へ流下する3ケースとした。噴火の規模は同委員会報告書での定義による大規模噴火と中規模噴火を仮定した。

#### 4) 火山観測情報の発信・広報と火山防災教育の普及・啓発

富士山の火山防災教育の普及啓発をさらに一層進めていくため、以上の火山観測情報、火山知識をはじめ、富士山に関する基本情報を発信するよう体制を整備し、環境科学研究所において公開する予定である。その取り組みについて報告する。

Keywords: Fuji volcano, volcano disaster prevention, Information center, volcano monitoring, active volcano, disaster prevention education